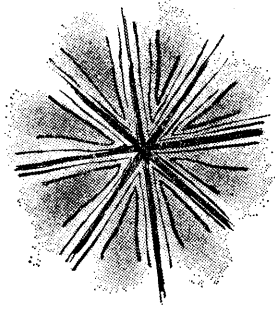


近代短歌に現われた子ども  
(十四)



大塚 雅彦

(29) 金子薫園

薫園は本名雄太郎、代言人武山助雄の子として明治九年（一八七六）東京・神田で生まれたが、外祖父に養われて金子姓となった。補充中学校（後の府立四中）に入り途中で東京府尋常中学校（後の府立一中）に転じたが、病気のため中退した。その後の職歴としては新潮社に長く勤め、昭和十八年に調査部長を退職している。昭和二十三年、日本芸術院会員に選ばれた。同二十六年三月逝去、七十六才であった。

彼は中学時代から文学を好み、「少年園」「少年文庫」等に文章を投稿していたが、明治二十六年十月、落合直文の浅香社を訪ね入門した。三十年、雑誌「新声」の和歌欄を担当し、またその編集を

助けた。三十五年尾上柴舟と共選の『叙景詩』を刊行し、新詩社の浪漫派歌風に対して叙景歌運動を展開した。三十六年には「白菊会」を起し、岡稻里・平井晩村・田波御白・吉植愛劍(庄亮)・土岐湖友(哀果すなわち善麿)らを擁し育てた。三十七年「新潮」が創刊されるや、和歌欄を担当、その後長く同社との関係が出来た。三十八年「短歌研究会」を起し、大正七年十月、その機関誌「光」を創刊した。昭和初期には自由律へと移ったが、晩年は定型に復帰した。

彼の歌風は清新な叙景歌から、絵画的な嗜好を反映して耽美的、浪漫的となったり、自然主義の隆盛と共に現実的となったり、時期によって変化はあるが、「早くから清楚典雅な歌風を示し」「一言にして叙景的で温雅というに尽きる」(桜楓社版『和歌文学講座』第8巻、「近代の歌人」I所収、平野宣紀「金子薫園」(昭44・4)といえよう。歌集は世評高かった処女歌集『片われ月』(明治34)を始め、最後の『朝蛸』(昭18)に至るまで合計十二冊あり、その他に数冊の自選歌集がある。歌文集

もある。『金子薫園全集』(大正14)もあるが、もとよりその後の作品は収めていない。その他、数多くの短歌入門書や歌文啓蒙書の著作がある。

① 花かざす島の少女が黒髪をましろき衣をなぶる春風  
② うら若き村医の妻が眼病む子の手をひきいづる小春の戸かな

③ いつまでも病児の顔の目の前の枯草路にちらつける  
かな

①は歌集『小詩国』(明治37)所収。旅行先での属目の歌でもあろうか? 「少女が」は此の場合「少女の」だろう。当時としてはいかにも新鮮な詠風である。この歌集の成立について薫園は「絵画に対する嗜好が作の中に著しく加はって来た」と述べているが、花をかざす島の少女の黒髪と白衣とが春風になぶられている光景は、水彩画のおもむきがある。②は歌集『伶人』(明治39)所収だが題材が珍らしい。眼病の子ども(患者らしい)を村医の妻が手をひいて戸口を出たという光景だが、「小春の戸」というあたりはいかにも薫園らしく、「ふる

さとの村医の妻のつましき櫛巻などもなつかしきかな」(『一握の砂』)の啄木の作品などと違った特色を示している。③は歌集『山河』(明治44)所収。道を歩いて行くと、病児の顔がいつまでも眼前の枯草道にちらつくというのである。この歌の前に続く作品群を見ると、この病児というのは、電車の中でかいま見た母に抱かれた発育不良の子どもらしく、それが強く印象にのこったのであろう。

### (30) 尾上柴舟

柴舟まいしゅうも明治九年、津山藩士北郷家の子として岡山県津山町(現津山市)に生まれ、同藩士尾上勤の養子となった。本名八郎である。養父は裁判所書記や判事をつとめた人である。明治二十三年上京、旧制一高を経て同三十四年、東京帝大国文科を卒業、東京女高師教授を長く勤め、女子学習院や早大でも教鞭をとった。「平安朝の歌と草仮名の研究」で文学博士となる。昭和十二年、帝國芸術院(後の日本芸術院)会員に選ばれた。国文学者・

歌学者であると共に、仮名の名手で「行成以後第一人」と称された。晩年は中国小説の研究、翻訳にもつとめた。昭和二十四年から没年まで「歌会始」の選者を続けた。同三十二年、流感のため永眠、八十二才である。

短歌は始め桂園派の大口鯛二に学び、明治二十八年一高入学と共に、教授の落合直文の門(浅香社)に入る。同三十一年、久保猪之吉らと「いかづち会」を起す。三十五年、同門の金子薫園と共に前述の合同歌集『叙景詩』を刊行して叙景歌運動を進め、三十八年には前田夕暮・若山牧水・正富まさとみ汪洋・有本芳水・三木露風らが柴舟を中心にして「車前草社」を結成、詠草は「新声」等に発表された。大正三年四月、水蘂みずかみ社を結成、歌誌「水蘂」を主宰して歿年に及んだ(同誌は現在も継続している)。歌集は前述の『叙景詩』を始め、『銀鈴』(明治37)、『静夜』(明治40)、『永日』(明治42)等から遺歌集『ひとつの火』(昭33・9)に至るまで十五冊ある(詩歌集や歌文集を含む)。なお、『ハイネの詩』(明治34)のような訳詩集もある。『尾上柴舟全詩歌集』(昭43)も出

ている。

歌風は『叙景詩』時代の清新な自然詠、『銀鈴』時代の西洋詩の影響、『静夜』『永日』の頃からの内省的、思索的傾向や自然主義の影響等、そのときどきの詠風を示しているが、概して歌柄は穩健で静謐、典雅であり、国文学的教養に裏うちされている。しかし、「創作」一の八号（明治43・10）に発表された彼の「短歌滅亡私論」は歌壇にショックを与えた。なお、歌学・国文学関係の著作も『梨壺の五歌仙』（明治35）、『清少納言』（同）、『日本文学新史』（大正3）、『短歌新講』（大正4）、『歌と草仮名』（大正14）、『評釈新古今和歌集』（昭27）等、すこぶる多い。中国小説の訳本『快心篇』（昭19―23）等もある。

① なつかしきおもひ湧く日は市に立ちもの乞ふ子らも  
しる人のごと

② 霜白き村の板橋弓なりに曲げてゆすりしわが幼どち  
③ 白々とわが子の骨の見えて来ぬあな朝の日のあきら  
なるかな

④ ことさらにつくる笑顔もしばしにてわらひくづる  
わが少女ども

①は柴舟作品でも最も有名なもので、教科書にも多く採用されている。『静夜』最初の一首。「漫に何となく、人懐しさに耐へやらぬ日は、街に行きあふ食さへ知己の様な気がする云々」と作者自身、注釈している。「子ら」というのは「人の子」というように大人、人間一般を指すのかもしれないが、「水甕」を主宰した加藤将之は「街頭に立って物乞いをしている子供」（傍点大塚）と解している（加藤『鑑賞尾上柴舟の秀歌』昭49・12）。②は歌集『空の色』（大正8）所収。「どち」は同類をいう語で仲間を指す。村童たちの腕白ぶりが眼に見える。③も同書所収。「生れしの子を失ひて十首」の中の一首で、「火葬場にて」の脚註がある。「あな」は「あゝ」（嗟、噫）である。大正五年十二月、作者夫妻に珍らしく男児が出生したが翌日永眠した（以後、実子に恵まれなかった。嗣子尾上兼英氏―東大教授、中国文学者―は養子である）。④は歌集『朝ぐもり』（大14正）所収。

「少女」という題の中の一首。次に「おどろきの眼まなこみはりてわが少女世になき事を聞くすがたする」という歌もあり、女高師での教え子たちの姿態をうたったものか？ちなみに柴舟は教室において駄洒落の連発であったという(加藤、前掲書)。天成のユーモリストだったらしく、楽しい授業であつたらしい。

### (31) 前田夕暮

夕暮ゆぐれは本名洋造、明治十六年(一八八三)、神奈川県大住郡(後の中郡)大根村(現秦野市)大字南矢名の農家に生まれた。中郡中学校を神経衰弱のため中退。その後各地を放浪、三十七年上京、尾上柴舟の門に入り、国語伝習所や二松学舎に学ぶ。職業としては父の経営していた山林業を継ぐ。昭和二十六年、糖尿病と胸部疾患のため死去、六十九才であった。彼は少年の頃「文庫」「明星」を読み文学に志した。前述の如く上京して、柴舟を中心とする「車前草社」が結成されるや同人となる。明治三十九年「白日社」を創立、翌年歌誌「向日葵ひるあき」を発

刊したが二号で終る。その後「文章世界」や「秀才文壇」等に関係したが、同四十四年「詩歌」を創刊。その後、一時作歌を休止したが、大正十三年「日光」創刊に参加。昭和三年「詩歌」を復活、同四年自由律短歌に移行したが、同十八年定型に復帰した。

彼は「明星」の浪漫主義に対抗して出発したが、歌集『収獲』(明治43)の頃より自然主義歌風を確立し「牧水・夕暮時代」と併称された。彼の作品は絵画的な色彩を中心とする感覚の鋭さに特色がある。生涯、何度か歌風の転換をしたが「未完成から未完成への道を歩いた歌人」「老成を拒否しつづけたその歌人生涯は近代歌人の中に類型を見ない」(『日本近代文学大事典』、木俣修執筆)といわれる。歌集は『収獲』を始め、最後の『夕暮遺歌集』(昭26)に至るまで主なもの十四冊あり、選集も多い。また彼は随筆にも優れ、『緑草心理』(大正14)を始め九冊の随筆集があり、数冊の歌論集もある。『前田夕暮全集』全五巻(昭47-48)や、『前田夕暮全集』(昭45)、『定本前田夕暮短歌作品集』(昭38)等もある。

なお、「詩歌」は戦時中に休刊したが、昭和二十一年復刊し、現在、嗣子の前田透氏（歌人、明星大教授）の主宰で継続されている。

①子供らは土手にひそまり空をみるまた一人きてならびけるかも

②ばつとひとり光明界にをどりいでしあから裸児こゑたかくなく

③色あかき春の帽子をかぶりたる我が子いできて家いでにけり

④川床にわがねてあればまはだかの童子きたりて顔またぎすぐ

⑤赤い風車の下、敏感な検温器のそばで、わが児さよりのやうに寝てゐる

①は歌集『深林』（大正5）所収。「冬日公園」一連中の歌。この歌集は「前期前田夕暮の到達点と言われ」（前田透『評伝前田夕暮』昭54・5）が、抄出歌はいかにも整った印象的な作品である。②も同書所収で、「大正三年九月十六日、長男透生る」の詞書がある。生

れ出た赤ん坊の裸児はだかごを「光明界に躍り出た」と喩えるあたり、いかにも夕暮らしい調べである。③は歌集『原生林』（大正14）所収。「草と樹と土」一連中の一首。大正八年作だから此の「我が子」は前年に生まれた長女妙子か。一、二句いかにも気分よい歌だ。④は歌集『虹』

（昭3）所収。八月初旬に長男透や北原白秋等数名と共に塩原に遊んだ折の作中の一首、「塩の湯」の脚註がある。村童の天衣無縫ぶりが微笑を誘う。この頃作者はしばしば裸かの子どもをうたっており、大正十三年作に「蓮のはなもてる裸かの童子めて炎天の道にわれ等を見たり」「まはだかの童女こよ裸かの子を負いて川わたりをり臍はらぬらしつつ」等がある。⑤は歌集『青檜は歌ふ』（昭15）所収。口語自由律時代の作品である。「南湖院（1）」一連中の一首で、「昭和七年七月、わが子妙子、南湖院入院」の詞書がある。妙子は後に昭和十一年、五年の闘病の結果自宅に於て十九才で夭折する。南湖院というのは当時茅ヶ崎海岸にあった東洋一の結核専門の病院であり、多くの文学者がここに入院した（歌誌「樹木」昭53

1月号―8月号所収、拙稿「南湖院物語」参照。この歌、入院中の愛児を歌うのにも「赤い風車」や「さより」（針魚ともいい、体は青緑色の細長い近海魚）を用い、感覚的な発想はいかにも夕暮作品らしい。

### (32) 太田水穂

水穂は本名貞一、明治九年、長野県東筑摩郡原新村（後に広丘村、現塩尻市）の農家に生まれた。明治三十一年、長野師範卒業、一、二の小学校勤務を経て、長野県立松本高女教諭となる。四十一年辞任して上京、日本歯科医専倫理科の教授となる。翌年、有賀みつ（後の歌人四賀光子）と結婚。歌人としての生涯を送り昭和二十三年、芸術院会員となる。同三十年の元旦に逝去、八十才であった。

彼は師範在学中から文学に親しみ、詩を「文学界」等に投稿、明治三十二年、窪田空穂らと新派和歌の同好会「この花会」を結成、四十年信濃毎日新聞の歌壇選者となり、上京後は小説や評論、随筆等にも活躍した。大正

四年七月歌誌「潮音」を創刊主宰し、歿年に及んだ（同誌は嗣子の太田青丘博士——本名兵三郎、中国文学者、法政大名誉教授、養子であるが水穂の甥にあたる——が主宰して現在も継続している）。歌集は『つゆ草』（明治35）を始め遺歌集の『老蘇の森』（昭30）に至るまで十冊ある。その歌風は自然主義や写生主義ときびしく対立し、また、俳諧的手法や中世象徴歌風などをとり入れて、日本的象徴を強く重んじた。万有愛の理念を掲げたこともよく知られている。歌論書として『短歌立言』（大10）、『花鳥余論』（昭22）等がある。古典文学研究にも業績多く『新釈伊勢物語』（明治45）や『芭蕉俳諧の根本問題』（大正15）、『芭蕉連句の根本解説』（昭5）等があり、大正九年頃から諸学者たちと『芭蕉俳句研究会』を開き、その同人達との合著も数冊あり、古事記研究の『神々の夜明』（昭15）もある。『日本和歌史論中世篇』（昭24）、『同上代篇』（昭29）は名著といわれる。『太田水穂全集』全十巻（昭32―34）も刊行されている。

①父母に手をば引かれてうれしきか此の子は足をあげ

つつぞゆく

② 椋鳥のあらしの如く桑の木の熟れ実にたかる青わらべたち

③ 履きて来て忘れてゆきし六つの子の赤緒の木履若草の庭

①は歌集『雲鳥』（大正11）所収。大正七年作。父母に手をひかれ、派手に足をあげつつ歩いてゆく子供への愛憐の情がにじみ出ており、「ほほえましい街頭スナック」（太田青丘『太田水穂』昭36・6）である。前々年の大正五年に水穂は亡兄の第三子をひきとって養子にしたので、幼児を想う情が深かったのである。②は歌集『冬菜』（昭2）所収。「青わらべ」は年若く未熟な童を指す。桑の実の紅く熟したもの（私の郷里ではど、どめといた。唇のまわりを真っ赤に染めながらこれを食べた幼時を、なつかしく私は想い出す）にたかっている幼童たちを「椋鳥のあらしの如く」と形容したのは絶妙だ。この田舎の子ども達に親しい鳥の集団の生態も、農村出身の筆者にはなつかしい限りだ。ワッと襲ってくるよう

な大群の動きをするのである。感覚的な把握のにじんでいる作品である。③は歌集『流鶯』（昭22）所収。「孫女」の脚註がある。淡々とうたっているが、幼い孫娘の生態が眼に見えるようで、置き忘れた赤い鼻緒の木履も可憐である。

「ぼくり」という擬音めいた発音も、歌柄を愛すべきものにしているよう。石川啄木の「わかれをれば妹いとしも赤き緒の下駄など欲しとわめく子なりし」（『一握の砂』）なども思い出される。なお、水穂の孫をうたったものに「坂下にむれ遊びる童べらの声のなかなるわが孫のこゑ」（『老蘇の森』）等がある。

（お茶の水女子大学）

